

ロボット支援下胃切除術の再導入初期における安全性と有用性：腹腔鏡下手術との比較および学習曲線の検討

まつ	ばら	たけし	かじ	しゅん	すけ	おか	むら	ひろ	き
松	原	毅	梶	俊	介	岡	村	拓	樹
たに	うら	たか	ひと	はやし	ひこ	た	なか	たか	ゆき
谷	浦	隆	仁	林	彦	田	中	貴	之
やま	もと	てつ	ひ	だか	まさ	あき			
山	本	徹	日	高	匡	章			

キーワード：ロボット支援胃切除術，腹腔鏡下胃切除術，手術時間，術後合併症

要 旨

【目的】新たに編成された上部消化管手術チームにおけるロボット支援下胃切除術（RG）再導入初期の安全性と有用性について，腹腔鏡下胃切除術（LG）を対照として，手術時間，術後合併症および術後経過の検討を行った。

【方法】2024年4月から2025年3月までに原発性胃癌または食道胃接合部癌に対して施行されたLG（n=31）およびRG（n=22）の計53例を後方視的に解析した。患者背景，手術関連因子，術後成績を比較し，RG群ではCUSUM分析により手術時間の学習曲線も評価した。

【結果】RG群では手術時間が有意に長かったが（ $p<0.01$ ），術後CRP値（3日目）は有意に低かった（ $p<0.03$ ）。術後合併症はLG群で19.4%，RG群では0例だった（ $p<0.01$ ）。CUSUM分析では13例目以降で手術時間が約25.7%短縮した。

【結論】教育体制と手技の標準化が整えば，RG再導入初期でも安全かつ低侵襲に施行可能であり，術後回復促進や合併症の低減が期待される。

はじめに

胃癌は本邦において罹患率・死亡率ともに高い悪性腫瘍であり，その治療には根治性を目指した

外科的切除が中心的役割を担う。近年，患者のQOL向上と早期社会復帰を目的として低侵襲手術への需要が高まり，腹腔鏡下胃切除術（LG）が広く普及している¹⁾。LGは開腹手術と比較して術後疼痛の軽減，早期離床，在院日数の短縮など多くの利点を有し，複数の臨床試験でその有用性が示されている²⁾。さらに，手術支援ロボット

Takeshi MATSUBARA et al.
島根大学医学部 消化器・総合外科
連絡先：〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1
島根大学医学部 消化器・総合外科